

〔翻 訳〕

ヘルムート・プレスナーの人間学とスポーツ哲学

フォルカー・シュールマン
藤 井 政 則 (訳)

訳者まえがき

本稿は、2012年9月28日に本学サテライトで開催された研究フォーラムにおいて、ドイツのケルン市にあるドイツスポーツ大学哲学・スポーツ哲学教授フォルカー・シュールマン Volker Schürmann 氏の講演 Plessners Anthropologie in der Sportphilosophie がなされ、その全訳である。現在、ドイツの哲学分野ではプレスナー・ルネッサンスと呼ばれた流れが顕著になっている。プレスナーには強いて言えば1945年を前後しての二つの顔があり、つまり戦後の社会学者として、ナチから弾圧を受けた戦前の哲学者としてである。このルネッサンスは哲学者としてのプレスナーに重きがある。すでにドイツでは1990年代あたりからプレスナーが再評価され、ゲッティンゲンで1999年に学会 Helmuth Plessner Gesellschaft が立ち上げられている。またその翌年にはフライブルクで第1回 Internationale Helmuth Plessner Kongress が開催されており、プレスナー研究が国境を越えて盛んに行われつつある。この傾向はドイツのスポーツ哲学の分野でも然りである。その両分野の中心にいるのがシュールマン教授であり、その学会の中心メンバーでもある。このような社会的流れが生じた時代的要求は、その底辺に1900年代の初期と現代が、人間を捉える上で共通する社会的・学問的な大きな変化があるのかも知れない。もちろんプレスナーに否定的な J・ハーバーマスに在っても身体論においては肯定的に論じるようになっており、他方、日本

においてもプレスナーが密かに用いられたりしている。このことはスポーツ哲学において、新しい理論的支柱として「暗黙知」ないし「身体知」の理論が語られつつあるなかで、プレスナーとの関わりを水面下で散見することができる。したがって、本論文はプレスナーに対する今日的な捉え方を指し示す重要な価値を持つとともに、少なくともスポーツ分野において、今後の日本での理論的在り方に何らかの影響を与えるものと思われる。

※本論文の翻訳スタイルは、①イタリック体をアンダーラインに変更し、②訳者の語彙の補足を〔 〕で示し、③〉〈を》《に変更し、④“ ”を「 」に変更した。脚注は文末注に変更した。とりわけ訳語に関しては奥谷浩一氏の『哲学的人間学の系譜 ―シュラー、プレスナー、ゲーレンの人間論―』等を参照させて頂いた。

スポーツ哲学（ドイツ語圏）において、私は以下の4つの主要なテーマ領域があると考えている（Schürmann 2011a）。

1. 人間的身体および生身と身体の関係
2. スポーツとしての運動
3. スポーツの規範的次元（スポーツ倫理）
4. スポーツをスポーツたらしめているものは何か？ 何がスポーツの固有の特殊性であり、論理なのか？

上記の4つのテーマ領域はスポーツに対する知識を必要としている。また、この4つのテーマは一般的な哲学的知識をも必要としている。つまり、人間的身体に対する問いはスポーツに限られたものではないし、身体的運動の実施に対する問いも、倫理的な諸問題もそうである。更に、スポーツ固有の特殊性と論理に対する問いは、まさに上記1～3の諸問題に関わって、スポーツの特殊性に対する身体と運動と規範への一般的理解に関係する問題である。

このことから、スポーツへの理解を超えて必要とされるのは広い意味において哲学的人間学である。私にはヘルムート・プレスナー Helmuth Plessner の哲学がとりわけ相応しいと考えており、たとえこの哲学が全くもってスポーツに関わるなかで発展をもたさなくてもそうである。このことを明確にすることは私にとって最も大切なことである。さて、上記の4つの問題領域と関わることの前段階として、先ず始めにプレスナー哲学の基本的特徴を粗略したい。

I H・プレスナー哲学の特徴

プレスナーの人間学には二つの中心のカテゴリーが在る。それは境界 Grenze と脱中心 Exzentrizität である。

境界のカテゴリーは、非-生命と生命を区別するうえで、つまり非有機体と生きた有機体を区別する上で、とくに欠かすことができない。人間学が自然哲学を抜きにして考えられないことをプレスナーは強調する。プレスナーの根本

的なテーゼはこのことと結びつきながら展開され、つまり、生きた有機体を実現するのは、非有機的自然物としてその境界とは別の関係である。生きた有機体は、非有機的なものと同様に、その間際においてただあっさりと死を迎えるというのではなく、境界に対して行動をする。身体-環境 Umfeld は生きた身体と関わって非有機的身体と比較して言えば再帰的 reflexiv である。「生物はただ周囲の世界の中にただ存在するのではなく、それに逆らって gegen 存在している。」このような境界の性質に応じて「二重の観点のなかで生きており、つまり相互内へ *ineinander* また「相互に」移行できないという相反する方向性である」（Plessner 1982, Plessner 1928の第3章を参照）。ここで重要なのは、一つの定式 Formel に帰するところであり、それは生物は「位置」づけられている、ということである。

プレスナーは生命体 Lebendigen の内に、更にさまざまな段階を、彼の言う生物の「有機体の様態 Organisationsweise」に関わって、区別した。プレスナーは植物の領域 Sphäre を「開かれた有機体の形態 offene Organisationsform」であるか、それとも「開かれた形態の位置性」として特徴づける。動物の領域は「閉じた形態の位置性」として、また人間の領域は「脱中心的形態の位置性」として特徴づけられている（Plessner 1928の第5-7章を参照）。重要な点であるのは、そして形態ないし有機体の様態についての発言で彼が注意を喚起していることとして、これらの段階化に関わって、再帰性の段階化の重要さである。生命体の本質は単に境界づけられているだけではなく、自身の境界に対して「能動的に」振る舞うことである。つまり、動物有機体は自身の境界に対してだけではなく、自身の境界に対するこの振る舞いを振る舞うのである。脱中心的な有機体が振る舞うのは、その境界に対する自身の振る舞いに対してだけではなく、それは境界に対する振る舞いに向けて振る舞いを形成するのである。再帰的段階のこの考え方は能力の考え方

Vermögenskonzeption に対しての逆の考え方である。脱中心性は、例えば動物と比較するならば、付加された能力としての特殊な能力ではない。もし能力として考えるとするならば、脱中心は選択的となるであろうし、従って、生命過程のなかで時として（もしくは、大体において）実現されるものであるが、大抵そうならない。そのこととは反対にプレスナーにとって、脱中心は実現されうるかそれともそうでないかという、そのような選択の問題ではない。このことはハイデガーとの会話の中で、脱中心的な位置化された存在が決して「気まぐれ Laune」ではなく、その存在の生命が時には脱中心的になるのである〔引き込まれる〕。脱中心性はひとつの構造であり、それは脱中心的に位置づけられた存在のもとで実現され得るような構造であると言える¹⁾。脱中心的に位置づけられているということは、三重の意味で位置づけられているということである。それは「生命体は身体 Körper であり、身体の外に（内的生命ないし魂 Seele として）、身体の外での〔実体化できない〕眺望点 Blickpunkt としてであり、この眺望点からすれば生物は両方である」（Plessner 1982, 11 ページ；Plessner 1928, 293 [=全集版 4, 365] ページを参照）。このように三重に、それは脱中心的な位置づけられた存在を意味するのであり、プレスナーは「人格 Person」, そしてその「現存在は、ほんとうは無の上に置かれている」（同上）。

脱中心的に位置づけられた存在がその生命様式〔ないし生活態度〕Lebensführung において、その原則としてこの自身の生命様式に眼差しを向けることによって、その限りににおいてこの生命様式を形成するのであるが、〔他方、〕このことから言えることは、「他者の眼差し」で見ているということである。それは固定できないし、実体化できない場所にあり、その場所から脱中心的存在は生命様式を言わば眺めるのである。それは境界-眼差し Grenz-Blick である。言わば外からの眺望ではあるが、脱中心的な生命様式のもとである。脱中心的に位置

づけられた存在は、その限りににおいてそれ自身中立的な観察者ではない。その上、非-中立性は固有の生命のなかでの位置性 Situiertheit である。それは生命様式の眺望 Perspektivität である——プレスナーが〔内部と外部の〕観点と非主観的〔アプローチ〕を区別したように（1928, 83 [=全集版 4, 130] ページ——²⁾）。脱中心的な生命様式はその生命様式〔そのものから〕得ることができるのであり、脱中心的眺望点はメタファー的に語られる。それは死角としてではなく、脱中心的な生命様式の盲点として語られるのである。従って、そのうちにはつきりと目にするものでも、ただ単に観念様式ではつきりと目にすべきものでもなく、まさにアウフヘーベンできない眺望 Perspektivität であり、脱中心的な生命様式なしにして脱中心的な生命様式は存在しない。つまりこのことは次の言葉に結びつく。人間は隠れたる人間である homo absconditus (Plessner 1969)。これを実際に方向付けると、無の上に真が据えられる、のではなく、別の観念様式であるべきその〔人間の〕意のままになることにおいて完全ではない。そうではなく、生命様式が生命形成 Lebensgestaltung であるのは、〔生命様式の背後にある〕脱中心性が無規定性 Unergründlichkeit であるからであり、〔但し〕そこでは無規定性を問題にしない。つまり、まだ十分に分かってはいないのである。主体性と観点 Aspektivität の区別に従って、プレスナーはゲオルグ・ミッシュ Georg Misch と異なるところは、無規定性の二つの様式である。無規定性にとって深淵は「密接な verbindlich」ものであり、それは他方においてヘーゲルの「真無限」を「悪無限」と区別することにおいて一致する³⁾。

ここでドイツにおけるプレスナーの人間学に対する観点を、可能な限り手短かに、それもその有意性から幅広く用いられており、また恐らく最も注目すべき姿として見えるようにさせたい。別の目で見ること、これはプレスナーの意味するところは他者の目で見ることである。脱

中心的に位置づけられた存在 Wesen である脱中心的な眺望点は、プレスナーによって示された「共同世界 Mitwelt」のなかに置かれている。もしくは伝統的な専門語のなかに置かれている。脱中心的存在は精神 Geist（英語の spirit であり、mind ではない）の領域のなかで生きている。脱中心性は原則的かつアウフヘーベンできない私／君－我々－関係である。それをプレスナーの固有の言葉を使って最もうまく表現しているところを示したい。「共同世界は個人 Person を取り囲んではいない […]（略）…」。共同世界は個人「の世界」を満たすものでもない […]（略）…。共同世界は個人によって支えられ、形成されることによって個人を支える。精神の領域は私と私との間、私と君とのとの間、私と共同世界にある。[…]（略）…」我々は任意からなる集団と言うよりも、それに特徴づけられた領域それ自体は、それだけで強調されて精神と呼ばれている。[…]（略）…」現実共同世界であり、このことは「他方において」個人のためだけにもある。というのは、共同世界は脱中心的位置形態によって保証された領域を示すものであるからであり、また、共同世界は単数と複数を一人、二人、三人にそれぞれ区分する基礎をなしているのである。そのことから領域は共同世界からなる切断面 Ausschnitt であるとともにそれ固有の生命基盤であると言える。つまり、領域は純粋な我々であり、ないし精神「の世界」である。それと同時に人間は精神である sein とともに精神をもつ haben。人間は身体と魂をもつようにして精神をもつ。人間がこの両者をもつのは領野であるということからであり、そこに生きているからである。精神はまさに世界であり、我々は諸個人として生きており、まったく我々の位置形態が世界を含んでいる故にそこにいるのである。」（Plessner 1982, 14ページ）

Ⅱ 脱中心性－人間－人格

プレスナーの哲学的人間学は形而上学をヘー

ゲルとフォイエルバッハ、デルタイの流れに「沿って」置き換えたと言うことができよう。そのことを可能としたのは、理性の哲学から精神（spirit）の哲学に置き換えたことであり、また、《我々全てのなかにある普遍的－人間的なもの》（カント）から我々という哲学に置き換えたことであり、このことが個人の保護（例えばミッシュ Misch）という名のもとにおいてなされたのである。そして、まさにこのことはプレスナーの哲学の恐らく最も重要な観点である。

この置き換えは重要な結論をもつ。脱中心性「という考え方」は、これまで認められ、またプレスナーの受容がたびたびなされたことは今や異なるものであり、人間－である Mensch-sein ことと同義ではない。そのこととは違って、脱中心性は領野の構造規定 Strukturbestimmung である。この構造規定は、人間によって、つまりわれわれ類 Gattung の成員によってのみ ホモ・サピエンス を実現することができるということを、全くまだ積極的に主張しているものではない。また、構造規定が全ての類の成員によって実現されるものとして主張してもいい。あるいは別な表現で言うと、人間は脱中心的に位置づけられているのではなく、脱中心的な位置づけを認めている。プレスナー（1931）は（無規定な unergründlicher）人間として人間の「対話性 Ansprechbarkeit」の原則を語っている。

ここでプレスナーの超越論的哲学の基本姿勢に触れてみたい。動物と人間の経験的区別は、既に経験的区別の可能性の条件としてカテゴリーが前提されており、まさにあれかこれかの何ものかとしてのあるもの von etwas als etwas に対する感応性 Absprechbarkeit の原理が前提されてもいる。但し、そのことと結びついて言えるのは、脱中心性の構造が任意的に実現することができないことである。閉じた geschlossen もしくは中心的な有機体の形態は、言うなれば脱中心性の最低限の条件であり、そこにとどまっている。というのは再帰性

Reflexivität は反射的段階に対する行動を否定できず、その限りにおいてその段階に対する行動が可能なことから実現させなければならない。このような意味から、脱中心的に位置づけられた存在は有機的形態からすれば動物的〔な段階〕にとどまっている。それは脱中心性を成すまでには至っていないからである。この中心的な有機体の形態は、ただ徴候のみの価値、ないしプレスナーが指摘するような「ただ経験的な価値 nur empirischen Wert」(Plessner 1928, 293ページ [= 全集版 4, 365ページ]; Plessner 1982, 11ページ) のみをもつ。

結論は、脱中心的に位置づけられた領域のなかにあるものへの問いに対して、純粹かつそれだけではないような経験的〔な価値〕に應えることができるかによる。ヘルダーの言語起源論のなかで述べられているのは、脱中心性が認識できるものではなく、承認しなければならないものとしている。さらにそれを再び次のように指摘している。人格としての人間を重視するものはその歴史的、文化的に変化する故に、全ての人間、またさしあたって全ての人間が人格として認められなければならないことを確かなものにする、1776年〔アメリカ独立宣言〕と1789年〔人および市民の権利宣言(仏)〕、1948年〔世界人権宣言〕の人権の宣言がそうである。それ以前では(西欧の)人間は人格が認められることは難しく、また、その後においても不確かな状態におかれている。

そのことと同時に、例えば脱中心性が人間性という人間の規定が著しく少なく、それは個々の人間の規定においてもそうである。脱中心性が根本的に私／君－我々－関係であることから、脱中心の人 Exzentriker はいわば一人では存在できない。この観点は重要である。それは脱中心性は妥当性の問題であるが、確かにできるような事実の問題ではない。脱中心性は人間である Menschen-sein と同義ではなく、むしろ人格性 Personalität である。そして人格はこれに反して個人 Personen として人間について語ることであり、その語りに在っては必然的

に規範的な契機がなかに入り込んでいる。従って、不可避なこととして、人間学は既に規範的であることであり、即ち人格性に対する一定の見解という意味において偏りがある。どのような位置も「確に戦いの場 Kampffelde にいることによって、人間の存在に無関心でいられるようなことはない。〔但し〕そこにおいては、一定の考え方に向けての課題が既に最初から決定されているわけではない」(Plessner 1931, 221ページ)。

人格性 Personalität はプレスナーにとって規範的な観点において意味をもつ。つまり、人間の無規定性を守るということ、即ち、このことをきっぱりと明言したわけではないが、人間個人および人間性の開かれた発達可能性を守ることであり、それは西欧的－カント的な言葉〔の世界〕においてのことである。それは交換することができない一回限りを大切に、人間の尊厳を大切にすることである。

Ⅲ プレスナーとスポーツ学

プレスナーはオンモ・グルーベ Ommo Grupe を介してドイツ語圏でスポーツ学、とくにスポーツ哲学の論議に関わり始めた(Plessner 他 (Hg.) 1967, Grupe 1975, 1982, Meinberg 2006)。それはプレスナーの下で学んだクロコフ Krockow もそうである。二人はスポーツについて——クロコフは多く、プレスナーは少なく——論じている(Plessner 1956, Plessner 1967, Krockow 1967, Krockow 1972)。しかし、両氏はむしろ社会学者の眼差しでスポーツを論じ、スポーツの役割を近代社会のなかで、近代社会に向けて特徴づけようとしている。両氏の論議に欠けていたのは、プレスナーの人間学によって基礎づけられた展開である。しかし、前述のテーマ領域に対してのスポーツ哲学的な分析については直接かわってはいない。まさしく、根本的に成しえたことは、プレスナーをスポーツ学に結びつけたグルーベと、他の何人かの研究者による著作の意義

にある (Meinberg 2002, 184-189ページ)。

今まさにプレスナー受容はこの10年間においてルネッサンスを迎えている。量的にも質的に見てもプレスナーの人間学に対する知識は著しく変化してきている。前述した彼の哲学への考察は1970年代と1980年代が欠落しており、従ってその解釈も全く異なっていた。その違いの中心的なものを指摘したい。当時、プレスナーは哲学的人間学の代表的人物であり、人間—である Mensch-sein ことの存在の学 Wesenslehre が捉えられていた。そのことに積極的に同意する立場を示したのが例えばグルーベである。彼は、正しく論証できることとして、人間学の根本的な受け入れがなければスポーツ学的知識は有り得ないとするのである。そのことに関わって他方において批判的に拒否を示したのが例えばホルクハイマー Horkheimer である。彼は存在の学が非歴史的で変化しない人間学的な定数の考え方から著されているとしており、a) 事柄 Sache と b) 近代 Moderne とが相容れられるものではないとして厳しく拒否している。人間学の根本的な受け入れのその必然性に対する理解への批判にも関わらず、そこでは言わば歴史的な人間学が定着しており (スポーツ学では Gebauer, Kamper, Wulf), 哲学的人間学にははっきりと対立した姿勢をもち、それはプレスナーの人間学に対して際立っている。他方において、人間学的の受け入れに関わるその起こり Genese と妥当性 Geltung との区別が薄れてきたことへの非常に高い代償を払い、同時に歴史化すること及び社会化することへの高い代償もそうである。同意および拒否的な観点においても、これは確かに当時の哲学的人間学を端緒とした論議の在り方に特徴的な症状である。研究者たちを差異化することは確かに否定することができないが、——なによりもまして正当性に対して個人の関心事で比較すること——これは、共通した話題を前にしては退けられるべきである。この観点にいて、先に触れたグルーベの著作は当時の事情の物差しでもある。それは、〔グルーベの〕スポーツ人間学についての

著作ではあるが、そこにはプレスナーへの関わりを見ることがない。このことに対して批判するつもりはないが、ここでは当時の議論の確認だけにとどめたい⁴⁾。

1920年代と1930年代のプレスナーは、言うなれば歴史的な超越論的哲学として人間学を捉えていることにおいて (とくに参照として Plessner 1931), 存在の学と歴史化の対置として既に他よりも先んじている。プレスナーを支持する人は決まって自らこの〔秀でた〕点を進展させることもなく、当時として視野のなかにも入らなかった。むしろ歴史化に対向する人間学的な〔変化の中で保たれる〕定数 Konstanten としてプレスナーを捉えた。この両者は今日のプレスナーに対する論議の在り方から見て全くの誤りである。カンパー Kamper (Kamper 1973) に在っては、プレスナーの特別扱いが明白であり、結論的には哲学的人間学すべてに対して再び留保がなされるのである。

このことからここでは骨格のみではあるが示すべきこととして、スポーツ哲学の前述のテーマ領域に対して、プレスナー哲学を今日的な観点から生き返らせることである。

Ⅳ 身体—規範性—運動

人間学と結びついたスポーツ学に在って、誰から見ても至極当然で重要なテーマであるのは、身体 Körper と生身 Leib である。そのことからスポーツ学にとって大切なのは以下の二つの点においてである。その一つとして、スポーツ学は人間の身体性 Körperlichkeit がテーマとされ、またそれが中心に置かれてもいる。〔このことが意味するものは〕人間の主知主義的な還元が依然として影響を与えている伝統に対しての攻撃であり、故にしばしば認められる「忘れられた生身 Leibvergessenheit」(Meinberg 2011) に対してである。その二つとして、スポーツ学が身体と生身の客観的な区別に固執することであり、それと同時に、とりわけこの両方の根本的に異なる知の様式の区

別、つまり再現前化的な知 – それ Wissen-dass と現前化できる能力 Können である (Ryle 1969, 第2章)。

この区別に関してプレスナーの特徴と彼本来の論点は、身体と生身（または、身体をもつこと Körper-haben と身体であること Körper-sein）の二面性 Zweiheit でもって十分としないことである。この二極性 Zweipoligkeit を組上に載せることによって、身体と生身の二元論 Dualismus を超えることができるかも知れない。プレスナーはこの一連の問題を当初から抱えていた。その理由として、脱中心性は純粹にそれ自体において三重の位置性 Positioniertheit であるということからきている。従って身体と生身の区別は最初から個人 Personen の区別である。同時にプレスナーの分析の一貫性は、身体と生身の区別にあるのではなく、身体と生身と人格 Person の区別にある。強調するならば人格性 Personalität の、ないし還元できない第三のものとしての精神の強調はマックス・シェーラーの方法である。彼が熱心に強調することは、実体化できない純粹な遂行特性 Vollzugscharakter [(パフォーマンス特性)] の還元できない固有の意義であり、それは人格性 Personalität ないし精神と呼んでいるところのものである。確かにシェーラーにとって、身体的な存在であることは個人 Personen にとって本質的ではない。純粹な遂行 – 精神の固有の意義へのこだわりは、非身体的なかに問題を捉えようとする——全くの倒錯である——彼の「理論的發展の」可能性を閉ざすものである。形而上学者シェーラーにとってはっきりしていることは、非身体的（キリスト教的）な神が単なる人格 Person ではなく、それどころか本来の意味において人格 Person なのである。プレスナーはシェーラーの根本的な認識を精神の実体化できない実行特性として突き放し、彼は厳しい現実を知り、ただ生身をもった人格 leibhaftige Personen のみを知る (Schürmann 2012)。

規範性という根本的で明確な反道徳哲学の考

え方は、プレスナーを通じて得たものであり、とりわけ最も重要な点である。その理由として、脱中心性は、明確にされると同時にただ認識されなければならないというようなことではなく、人格性の特徴づけであり、そのことから認識されなければならない。というのは人間 – である – 脱中心性 – 人格性 Personalität の三面性 Dreiheit が内在的で規範的であるからである。プレスナーに関わって、おそらく論理的に第二の歩みにおいて、この記述が専門的な見解から規範を評価するために人間 – であるないし人格性について《中立的》に且つまったく記述的に語ることはできない。ある人を人間であることを確認すること、そのことそのものは評価する行為である。従って我々が「われわれ一人 unsereins」について語るとするならば、そのときすでに基本規範 Grundnorm は使われている。当然のことではあるが、この基本規範は内容に従って区別がなされるのであり、さまざまな時代やさまざまな文化、更には同一の時代と文化の枠の中でのさまざまな社会的共同体 Gemeinschaft、時にはまったく異なった人間が「われわれ uns」について語るか、それとも「われわれ」から排除するかである。まさにこのことは、この基本規範が超越的で歴史を超えた状態ないし文化を超えた状態を「仮定する」ものではなく、人間の世界で政治的に激しく戦っていることを示している。ここでプレスナーの最も重要な点を示してみよう。そのような基本規範は、我々が「われわれ」について語るとき、そのときすでに必要とされている。哲学的歴史的に言うと、この基本規範はカントの意味における制御的な理念ではなく、ヘーゲルの意味における「質的規定をもった定量としての」限度 Maß である。

ところでこのことをスポーツに直接的に結びつけることは困難である。それは、我々が生まれながらにして国民 Staatsbürger / 人格 Person であり、他方、我々が自由意志で、自身の判断から出発してスポーツゲームに参加するしないを決める限りにおいてそうである。し

かし、そこでは理念と限度の間にある論理的な区別は存在し続けている。この意味において、そのための多くの比較可能性が与えられている。我々がスポーツの試合に参加する場合、その時にはスポーツの精神、すなわちスポーツの基本規範としてのフェアネスへの義務が生じる。さらにそれに続いて、このフェアネスの基本規範を制御的理念として、もしくは限度として描こうとするのか、重要な違いに相對することになる (Schürmann 2008, ただしそこではプレスナーに触れていない)。制御的理念に関わった要求は闘いのなかでの固有な関心への自覚 Wahrnehmung でもってしても止揚できない。もしスポーツがただひたすらフェアに行われなければならないとしたら、やむ得ない場合に限りスポーツはフェアを無視して行えるであろうか。〔現実の〕スポーツ実践のなかでは次のように言われている。非常事態ではまず第一に勝利を意識し、それに続く第二としてフェアネスに配慮する。最後にくるべきものとして、利他的な行為であろうか。この利他的な行為はスポーツ固有のものを保持しようとして闘いのなかに入り込むことであり、〔闘いのなかで〕具体的で実践的であり、僅かにもしくは豊かに在るのかもしれないし、そうあるべきものなのであろうか。それに対して限度としてのフェアネスの要求は共同で受け入れた義務に関する要求であり、それは固有の喜びを守るものでもある。この固有の喜びはフェアなゲームが行わなければならない失われていこう。ここで指摘したいこととして、フェアなプレイをしないならばそれはスポーツとは言わない。周知のことであるが、この区別は〔フェアプレイを〕現実的に徹底するなかで、粗野なものとの区別を、誰の目にもさらすことになる。それはスポーツ連盟の使命からドーピング防止に至るまでのことである。

人間的ないしスポーツ的運動にテーマ領域を据えたい。また、ここでも二重の意義があり、それは身体と生身というテーマ領域に類似している。その一つに、人間的運動の意義に関心を

呼び起こす事実である。例えば、そのことによって教育と陶冶の固有の次元としてスポーツ運動がその課題を背負い、結局、スポーツ授業にそれ固有の位置、また必須の位置を音楽や芸術と並んで確かなものにする。その二つに、ここでは決定的でもあるが、どのようにして運動の現象がテーマにされるかである。そして、この10年間にいわゆる意味形成 Sinnbildung である行為遂行的 performativ な特徴がますます明らかにされてきた。運動はこの観点からはただ純粹にそれ自身において重要な現象であり、且つ無視できない現象ということだけではない。その遂行性格に関わって重要なのである。よく一般的に言われていることであるが、言ってみれば現象はただ単に〔身体を〕休ませ ruhend ないし動かしているか動いているかのようなものではなく、ただその〔運動の〕実施過程においてのみ、運動が存在し、意味を成す。古典的例としてオースチンによる言語行為論を思い起こしてみよう。もし誰かが、次の言葉「私はあなたに洗礼を施し、タイタニック Titanic と命名する」のを許されるならば、この言葉の遂行 Vollzug は同時に洗礼である。すなわち、そこでだれかが洗礼を遂行することではなく、このことは同時に〔その内容が〕語られてコメントされるのである。ここで明確にされることとして、身体と生身のテーマを論じる際に前に述べたような区別の中心にあるのは知識様式であり、身体と生身の区別を必然的に区別するような知識様式である。その〔知識様式の〕本来的な意義なり基礎は先ずもって意味形成の遂行的特徴をテーマにすることによって獲得されるのである。非常に抽象的な言い方をすれば、すでに触れているが、表象的な知識 Wissen-dass と現前化の能力 Können との間にある区別は根源的に知識存立にとって二種類の区別ではなく、根本的には、一つには現前化的ないし再現前化的な知の存立の区別であり、二つには遂行する上での知識である。最初に知識が受け取られ、続いて人間的ないしスポーツ的な運動がスポーツ学のこの上なく重要な対象ということだ

けではなく（他の重要な対象と並んで）、運動が根本的分析の統一を完成させるという意味をもつのである。別の角度から言うと、意味形成である行為遂行性という考え方の枠組みにおいて運動性 *Bewegtheit* は、単にある種の意味の形成 *Sinngebilde* という特性だけではなく、意味の形成が先ずありきであり、そしてその他として内－運動－である〔運動内存在〕*In-Bewegung-sein* があり得よう。運動する身体 bewegte Körper ないし 身体的運動 Körperliche Bewegungen が、スポーツ学において分析がなされるなら、そこにはかなり考え方の差異がある。

但し、このような差異に関わって、プレスナー〔に対する見方〕はまだ揺らいでいる。時々強調されていることとして（Haucke 2000; Schürmann 2002, 107-112ページ）、プレスナーの主著『有機的なものの諸段階と人間』（Plessner 1928）が明確な解釈がまだ許されていないことである。ここで扱われるテーマに関係してその解釈を次のように見ることができる。プレスナーには脱中心の遂行特徴がある。脱中心は明白に「ダイナミックな形態」である。確かにプレスナーに対して他の見方もある。脱中心性が平衡状態 *Gleichgewichtszustand* というものであり、それは外的な影響によって危険にさらされ、またこの影響に抗うことによって〔人間としての〕直立を獲得できたのであろう、とするものである。すでにこの解釈は当然ではあるが隠喩的である。というのは位置性 *Positionalität* がいわば直立することであり、内－運動－である〔運動内存在〕ではない。プレスナーを手がかりにして首尾一貫したパフォーマンスの理論家となるには、1928年の上記の著作の解明の必要がある。プレスナーの諸段階が必要としているのは、その固有の道を展開する上での、言わば介護ないし産婆的な援助であろう。プレスナー自身、この援助をゲオルク・ミッシュ Georg Misch [1878-1965] およびデルタイ哲学の徹底した継承者を得ている。ミッシュにとって重要な点は、即ちロゴス *logos* の

遂行特徴に対しての決定的な意義である。

V ポジティブで再帰的な人間学

スポーツの哲学的テーマ領域のなかで、このようなプレスナーの位置を個々においてどのように判断しようとも、プレスナーの人間学は直接的に人間－である *Mensch-sein* という存在の学 *Wesenslehre* を直接に重視するのではないことに基づいている。かつてのプレスナー受容の一般的主張は、彼の著作の個々について同意ないし拒否を繋ぎ合わせたようなものであり、今日的な受容から見ると時代遅れのものとなってしまう。1931年の著作に対しての諸段階の関係、つまりそこでは力と人間的自然 *Macht und menschliche Natur* が根本的に異なった規定がなされており、ここに若いプレスナー受容の全く決定的な〔転換点としての〕歩みが見られる。以前、誰の目にも明らかなように諸段階は主著として見なされ、そして力と人間的自然は歴史的・政治的な事柄への定式化した人間学の応用であると見なされている。プレスナーが諸段階のなかでポジティブな人間学を捉えていると仮定するならば、固定できる基本的構造が脱中心であるとし、またそれがそれ自体において人になるとする。もしそうだとすると、この固定できる基本構造から結果を引き出すことができるかもしれない。しかし、この主張が根拠のないものとして示される。〔とりわけ〕プレスナーの人間学は政治的人間学ではない。それは確証できる脱中心性から政治の世界のためのある種の結論を引き出すことができる意味においてそうなのである。しかし、それにも関わらずプレスナーの人間学が政治的人間学であるのは、脱中心性であるとともにそうでないというこのことの確立がなされていないという問題とは別に、むしろ人間への問いに対して端緒から政治的に激しく論議がなされていることからくる。そしてそのことに反して、プレスナーが力と人間的自然を諸段階から数年後に著した後に、初めて理解したというのではな

く、そのことは早い時期から哲学の基本的理解において重要であった。プレスナーはそのことを1918年の危機論文のなかで述べている(Plessner 1918)。1918年の時に「底の見えない危機」を指摘していたことが、1931年には人間である Mensch-sein ことの「限りなき Bodenlosigkeit」と「無規定性 Unergründlichkeit」に具体化する。そのことは〔プレスナーへの〕回想のなかで少しだけ次のように触れられている。それは人間が脱中心的に位置づけられていることを、プレスナーを通して言えるのではなく、人間を脱中心として位置づけてみなすことであり、また、我々が人間を無規定性、その開かれた発達能力を考慮し、守ろうとするとき、我々は人間を脱中心的とみなすべきである。更に、我々は近代 Moderne のなかでの全ての人間（人間においてのみ）を脱中心と見なすのであり、その理由としては、歴然として全ての人間に人格としての同等の権利が認められている故にそうである。とりわけアルルト Arlt とクリューガー Krüger の著作は、力と人間的自然に対しての諸段階のこれまでとは異なった関係にこだわり、ないしその後に明白な事態、プレスナーがまさに非ポジティブな存在の人間学 Wesens-Anthropologie を著したことにこだわをもったものである。その理由として挙げられるのは、彼は「自己脱安全装置 Selbstentsicherung」への不安がないばかりか、彼の人間学を根拠のないポジティブな考えに〔全く〕逆さまに基礎づけてしまったことである（Arlt 1993, Arlt 1994, Arlt 1996, Krüger 1996, Richter 2005, Schürmann 1997）。

ドイツ語圏におけるスポーツ学は幅広く今日に至るまであの以前の見解から出発している。それは、プレスナーにはポジティブな人間学を著そうとした、というものである。プレスナーに向けられたところものは、しばしば肯定的な意図においてなされている。しかし他方においては、同じメダルが相変わらず歴史的人間学をプレスナーに対して取り下げを求められている。

ポジティブな人間学から前に示した歴史的な超越論哲学へとプレスナーは展開し、また、それと同時に超越論哲学的なモメントの歴史学化ないし社会学化を拒否するそれらの決定的な一歩は、彼の人間学が再帰的となるところにある。人間学はつまり脱中心性にあるが、単にある種の人間学的な根本構造を構想するではなく、同時に次のことを明確にする。それはその構想そのものが人間学として脱中心的位置性という立場を持つものである。ポジティブな人間学を信頼させようとする人間学的な構想は、何処にも場所を持つことなく脱中心性に触れるのではなく、それは必然的にそれ自身脱中心的に著されるのである。「ポジティブ」な人間学と「再帰的」な人間学のこの根本的な違いはとりわけリンデマン Lindemann の著作の中で強調されており、また同様の指摘がなされている（Lindemann 2009）。このようなことから再帰的人間学は場 Ort をテーマとして扱っており、そこから出発して理論が展開され、即ち位置づけられた自身を開示するのである。形而上学はカントに対して、形而上学的な論争のフィールドのなかで中立ではない。プレスナーの批判的な人間学はポジティブな人間学ではない。といってもその人間学は歴史化によるものではなく、その固有な位置性の再帰性 Reflexion によるものである。したがって、それは明らかに無条件的で絶対的な人間学ではなく、歴史的ではないのと同様に、条件づけられた人間学である。もし一人ひとりの人間が互いに尊厳を重視しようとするならば、脱中心的な位置づけを認めなければならない（schürmann 2006）。人は人間にそのように求めることができるが、そのことは必ずしもそうとは言えない現実がある（Plessner 1931, 148ページ）。

Ⅵ プレスナーとスポーツ哲学 —ひとつの例として—

プレスナーの哲学は（ドイツ語圏の）哲学やスポーツ哲学、さらにスポーツ学において冒頭

の三つのテーマ領域に関わって単に利用し尽くされるものではない。〔更に〕ここでは2006年のマインベルク Meinberg による研究成果で本質的なものが何ら変化したのではないとする。そのことにも関わらず、スポーツ哲学にとっての根本的なプレスナー受容からの主な収穫はひょっとして全く他の領域に認められるのかも知れない。というのはそれはすでに述べたスポーツ学に固有な対象の四つ目のテーマ領域であり、ここでの締めくくりとして、ただ唯一の観点のみをテーマに挙げたい。

プレスナーは分析されるべき対象に対して歴史的な捉え方を徹底した思想家である。このスポーツの歴史的な捉え方、つまり生活世界の対象も学問の対象も含めて現実的に一貫して考えることは、全く言うが易し、行うは難しという問題である。言うが易しは、つまり、スポーツがそれ自身において非常に多様に存在しており、それは我々のこの世界のなかでも言えることであり、歴史的にも文化的な比較においてもそうである。しかしながら、多様さと可変性をたとえ明確に強調がなされても、それは変化をもたらすことではない。つまり、この多様さと可変性一般にのなかでスポーツが理解されたとしてもそうであり、そこに多様に存在するものがあり、そのこと自体には多様な何らかの決定をもたらすものではない故にそうなのである。普通、我々は、例えば、二人の政治家によるテレビ討論〔番組〕がスポーツの一つとして見放さない。〔ここでの〕スポーツの多様性はあらゆるスポーツの一部と考えることではなく、絶えずある決まった状況の多様性を意味する。もしここで本来の多様性を得ようと思うならば、大体においてそこにはジレンマが映し出されるだろう。そこに二者択一的にあるのは、このようなスポーツの固定化が歴史的に変わりうるものであり、そこには悪循環があることがはっきりしている。他には、それにも関わらずにつまるところ人間学的な定数が想定されるかである。まさにこの後者の変形 Variante は、哲学的人間学への眼差しを背景からすれば至極当

然であり、広がりをもつ。このことはまさにスポーツの歴史的な捉え方を拒否するものでもある。歴史的な可変性、それはこの定数の形成物であり、スポーツ自身の根本的理解からくるものではない。スポーツの〔理論的に〕必然的な文化史は、スポーツを形成させている、この決められている規程の歴史的で文化的な変形でなければならないだろうと、考えることができよう。そのことから論理的に一つのことが言える。それはそれ自体もろもろのことであり、また、それを考えることができることはプラトンやパルメニデス以来の西側ではひとつの「奇跡 Wunder」として見ることができる。

プレスナーの再帰的人間学はここでは実際に不思議である。その人間学は非歴史的な位置 Setzen と悪循環の間の固有の第三の変形をもたらすからである。基礎的 basal な対象規定はプレスナーに関わっていえば、位置 Setzung であり、この意味において対象形成の多様性の決められた基準である。したがって、これは例えば、オリンピックを近代スポーツの基準とする場合である。この位置は、前に述べたように、プレスナーとも関連して、非歴史的な定数ではなく、ないしより一般的に言えば、無条件で絶対的な位置ではなく、規定された位置である。その位置は他の可能性の傍らにある。

この点に関わって、プレスナーの見方を利用することによって、どのような点においてオリンピックスポーツが（古典的）近代のスポーツの基準として捉えることができるのか、それを方法論的にしっかりと基礎づけることとして明白にすることができる。端的に言えば、競技者はスポーツの競争において、常に個人 Personen として認識されている。そしてスポーツ競技の特殊性と固有の論理においてフェアネスは実質的で方法論的にも、尊厳を人格性 Personalität という人間の権利としての理解の基準に相応しくする。

注

- 1) これはプレスナーが見るヘルダーの基本的な特

徴である。「人間の力のこの仕組みの全体を知性・理性・意識などと好きなように呼ぶがよい。これが個別的な力または動物の力の単に程度の高いものに対する名前だとされるのでなければ、私にとってはどのような名前でもよいのである。人間のすべての力の仕組み全体、人間の感受しつつ認識し、認識しつつ意欲する本性の働き全体、あるいはむしろ思考作用の唯一の決定的な力、これが、動物の場合に造形能力となるように、人間の場合には身体のある構造と結びつけられて理性と呼ばれ、人間にあって自由と呼ばれ、動物において本能となるものである。この相違は『力の段階、あるいは増補にあるのではなく、すべての力の全く違った種類の方向と展開にある。』」(J・G・ヘルダー『言語起源論』大阪大学ドイツ近代文学言及会訳、法政大学出版局、2002年、30-31ページ。一部、訳語を変えている。)

- 2) もしここでL・フォイエエルバッハを持ち出すとするならば、プレスナーはライプニッツのモノドロジーの「主要欠陥」を克服するだろう。「モノダはもとより、もっぱら諸神経から成立しているのであって血肉から成立しているのではないところの〈モノダ特有の本性〉の結果、世界のなかで生起するあらゆるものによって触発され且つ感動させられる。しかしモノダは世界の諸出来事を現場にいて眼で見たり耳で聞いたりしているいかなる証人でもない。すなわち世界の諸出来事に対するモノダの関与は単に読者の関与に等しいにすぎないのである。モノダは単に遠方から見ているにすぎない。しかるに或る事象を単に遠方から見ているにすぎないということ、すなわち実際の現存在なしに或る事象を現前させるということは表象することである。それ故にモノダはこのような関与によって、自分自身のなかから引きずり出されず、自分の心の家庭的平和にかんして妨害されないのである。一言でいえば、モノダはいっしょに行為する人格ではなくて、単に世界という劇場の観客にすぎないのである。そしてまさにこの点にモノドロジーの主要欠陥が横たわっているのである。」(『フォイエエルバッハ全集 第7巻』船山信一訳、福村出版、1973年、121-122ページ。)
- 3) 無規定性のこの解釈にとって重要なテキストはミッシュ (Misch 1929/30, Misch 1994) とプレスナー (Plessner 1918, 1931) である。人間学の「生命論理的 lebenslogischen」な解釈はプレスナーの展開に事実即した正当性があり、脱中心性はヨーゼフ・ケーニヒの「交差 Verschränkung」としたことと一致しているのかも知れない (Plessner 1928, 詳しくは

Schürmann 1997, 2011)。

- 4) すでに当時の論議に向けて批判として論じなければならなかったであろう唯一の点は、プレスナーとゲーレンが〔区別なしに〕セットで指摘されていたことであった。そのことは当時すてによく知られていたことではあるが、非難は必ずしも妥当するものではない。つまり、両者間の根本的な違いを今日においてもなお全く事実として認めようとしないのである (詳しくは Fischer 2008)。

参考文献

- Arlt, G. (1993): Helmuth Plessner zum hundertsten Geburtstag. In: Philosophisches Jahrbuch 100 (1993) 1, 114-130.
- Arlt, G. (1994): Fundament oder Zirkel? über die Schwierigkeit, Helmuth Plessners Werk als Einheit darzustellen. In: Philosophische Rundschau 41 (1994) 2, 159-165.
- Arlt, G. (1996): Anthropologie und Politik. Ein Schlüssel zum Werk Helmuth Plessners. München: Fink.
- Feuerbach, L. (1837): Geschichte der neuern Philosophie. Darstellung, Entwicklung und Kritik der Leibnizschen Philosophie. In: L. Feuerbach: Gesammelte Werke. Hg. v. W. Schuffenhauer. Berlin: Akademie, Bd. 3 (1984).
- Fischer, J. (2008): Philosophische Anthropologie. Eine Denkrichtung des 20. Jahrhunderts. Freiburg: Alber.
- Grupe, O. (1975): Grundlagen der Sportpädagogik. Körperlichkeit, Bewegung und Erfahrung im Sport (3., überarb. Aufl.). Schorndorf: Hofmann 1984.
- Grupe, O. (1982): Bewegung, Spiel und Leistung im Sport. Grundthemen der Sportanthropologie. Schorndorf: Hofmann.
- Haucke, K. (2000): Plessner zur Einführung. Hamburg: Junius.
- Herder, J. G. v. (1772): Abhandlung über den Ursprung der Sprache. Hg. v. H.D. Irmscher. Stuttgart: reclam 1966.
- Kamper, D. (1973): Geschichte und menschliche Natur. Die Tragweite gegenwärtiger Anthropologie-Kritik. München: Hanser.
- Krockow, C. G. v. (1967): Die Bedeutung des Sports für die moderne Gesellschaft. In: H. Plessner et al. (Hg.) 1967, 83-95.
- Krockow, C. G. v. (1972): Sport und Industriegesellschaft. München: Piper.

- Krüger, H.-P. (1996): Angst vor der Selbstentsicherung. Zum gegenwärtigen Streit um Helmuth Plessners philosophische Anthropologie. In: Deutsche Zeitschrift für Philosophie 44 (1996), 271-300.
- Lindemann, G. (2009): Das Soziale von seinen Grenzen her denken. Weilerswist: Velbrück.
- Meinberg, E. (2006): Helmuth Plessner: Stufen des Organischen und der Mensch. Einleitung in die philosophische Anthropologie (1928). In: J. Court & E. Meinberg (Hg.): Klassiker und Wegbereiter der Sportwissenschaft. Stuttgart: Kohlhammer, 178-190.
- Meinberg, E. (2011): Leibliche Bildung in der technischen Zivilisation. über den Umgang mit dem Leibe. Berlin, Münster: Lit.
- Misch, G. (1911): Von den Gestaltungen der Persönlichkeit. In: M. Frischeisen-Köhler (Hg.): Weltanschauung, Philosophie und Religion in Darstellungen von W. Dilthey et al. Berlin: Reischl & Co, 79-126.
- Misch, G. (1929/30): Lebensphilosophie und Phänomenologie. Eine Auseinandersetzung der Diltheyschen Richtung mit Heidegger und Husserl. Darmstadt: WissBG 31967.
- Misch, G. (1994): Der Aufbau der Logik auf dem Boden der Philosophie des Lebens. Göttinger Vorlesungen über Logik und Einleitung in die Theorie des Wissens. Hg. v. G. Kühne-Bertram & F. Rodi. Freiburg/ München: Alber.
- Plessner, H. (GS): Gesammelte Schriften. 10 Bände. Hg. v. G. Dux et al. Frankfurt a. M.: Suhrkamp 1980-1985.
- Plessner, H. (1918): Krisis der transzendentalen Wahrheit im Anfang. In: H. Plessner (GS), Bd. 1 (1980), 143-310.
- Plessner, H. (1928): Die Stufen des Organischen und der Mensch. Einleitung in die philosophische Anthropologie. Berlin/ New York: de Gruyter 31975 [auch in GS, Bd. 4].
- Plessner, H. (1931): Macht und menschliche Natur. Ein Versuch zur Anthropologie der geschichtlichen Weltansicht. In: H. Plessner (GS), Bd. 5 (1981), 135-234.
- Plessner, H. (1956): Die Funktion des Sports in der industriellen Gesellschaft. In: H. Plessner (GS), Bd. 10 (1985), 147-166.
- Plessner, H. (1967): Spiel und Sport. In: H. Plessner et al. (Hg.) 1967, 17-27.
- Plessner, H. (1969): Homo absconditus. In: H. Plessner (GS), Bd. 8 (1983), 353-366.
- Plessner, H. (1982): Der Mensch als Lebewesen. Abschn 1: Exzentrische Positionalität. In: H. Plessner: Mit anderen Augen. Aspekte einer philosophischen Anthropologie. Stuttgart: reclam, 9-15.
- Plessner, H.; Bock, H.-E. & Grupe, O. (Hg.) (1967): Sport und Leibeserziehung. Sozialwissenschaftliche, pädagogische und medizinische Beiträge. München: Piper.
- Richter, N. A. (2005): Grenzen der Ordnung. Bausteine einer Philosophie des politischen Handelns nach Plessner und Foucault. Frankfurt a.M./ New York: Campus.
- Ryle, G. (1969): Der Begriff des Geistes. Stuttgart: reclam 2002.
- Schürmann, V. (1997): Unergründlichkeit und Kritik-Begriff. Plessners Politische Anthropologie als Absage an die Schulphilosophie. In: Deutsche Zeitschrift für Philosophie 45 (1997) 3, 345-361.
- Schürmann, V. (2002): Heitere Gelassenheit. Grundriß einer parteilichen Skepsis. Magdeburg: Edition Humboldt.
- Schürmann, V. (2006): Positionierte Exzentrizität. In: H.-P. Krüger & G. Lindemann (Hg.): Philosophische Anthropologie im 21. Jahrhundert. Berlin: Akademie Verlag, 83-102.
- Schürmann, V. (2008): Zur Normativität des Sports. In: Spectrum der Sportwissenschaften 20 (2008) 1, 45-63.
- Schürmann, V. (2011): Die Unergründlichkeit des Lebens. Lebens-Politik zwischen Biomacht und Kulturkritik. Bielefeld: transcript.
- Schürmann, V. (2011a): Sportwissenschaftlich gebildete Sportphilosophie. Ein Plädoyer. In: Philosophische Rundschau 58 (2011a) 3, 203-225.
- Schürmann, V. (2012): Max Scheler und Helmuth Plessner – Leiblichkeit in der Philosophischen Anthropologie. In: E. Alloa et al. (Hg.): Leiblichkeit. Begriff, Geschichte und Aktualität eines Konzepts. Tübingen: Mohr Siebeck, 207-223.

(2012年11月22日掲載決定)